

母さんとラブホテルで汗だくになってセックスした日

僕の名前はハヤト。未亡人の母さんと二人暮らしだ。

僕が母さんとセックスするようになったのは丁度3年前。

誰もいないと思って母さんが入ってきた脱衣所に、僕がペニスをビンビンに勃起させて立っていたことがきっかけとなって母さんとセックスするようになった。

それから僕たちは数え切れないほどの濃密なセックスを重ねてきた。

僕にはもう恋人もセックスフレンドもいない。誰よりもセックスの相性が抜群の母さんがいるからだ。

僕たちは今夜、最近街にできた新しいラブホテルへ行ってみようという話になった。

「ハヤト、どんなところなのかしらね。母さん楽しみだわ」

「綺麗なところならいいね」

「新しく出来たんだから、綺麗に決まってるわ」

「ちょっと街のはずれにあって遠いけど」

「そうね。少しでも早くハヤトとセックスしたくて母さんたままないのに」

「我慢だよ我慢」

「そうね。あと少しの我慢よ」

病気で死ぬ前に父さんが残した言葉が僕の心に深く刻み込まれている。

「ハヤト、好きなことを思う存分して生きなさい」

父さんは具体的にどんなことを思ってこの言葉を残したのかは分からない。

だけど僕はこの言葉を、母さんと毎日思う存分セックスすることで実践している。

好きなことは母さんとのセックス。母さんとのセックスなんだ。

ホテルは宝石のようなライトアップが輝く綺麗なところだった。

いつも綺麗な宝石を身にまとう美人の母さんによく似合っていた。

ホテルの部屋に到着して僕は、冷蔵庫から水を取り出してコップに入れ飲んだ。

母さんにも差し出す。

「はい、母さん」

「ありがとうハヤト」

母さんも僕と同様に、コップを傾け水を一気に飲みこんだ。

これから始まるんだ。僕たちの素晴らしい世界が。

きっと汗だくになるに決まっている。こんな暑い夏の真っ最中だもん。

だから水分補給をはじめにしておくんだ。

「ハヤトの象さん早く見せて」

「分かってるよ母さん」

僕はパンツを脱ぎ、すっぽんぽんになって股間にぶら下がるペニスを母さんの目の前に差し出した。

体験版はここまでです。続きは製品をご購入下さい。